

# 私の風土記

今村 雄二郎 (株式会社アイヴィス 名誉顧問)

## 第二章

### 社会人一年生

昭和29年(1954年)後半には、造船疑獄と呼ばれる一大激震が政界をゆさぶり、深刻な不況が発生し、大手は軒並み新卒採用を中止してしまった。

そんな中で、私は古川系の中堅企業、古川電池に就職した。技術部の技術課に配属され、鉛蓄電池の設計を勉強した。自動車用が主力であったが、米海軍から海上自衛隊に供与された、潜水艦『くろしお』の蓄電池換装という要求があり、潜水艦用の蓄電池を試作せよとの命が出て、設計担当者として色々苦勞することとなった。

当時通常の自動車用では、電池の容量は高々120アンペア・アワー位であった。ところが潜水艦用となると、5000アンペア・アワー以上のものを作らねばならず、しかも試作費と期間が極めて限定されている。先輩の指導と、私のない知恵を絞った結果、自動車用の基板を縦・横に多数結合して、大型基板を即製した。

営業部門は我々の試作実験データによって、日本電池、ユアサ電池と競合して入札に参加したのだが、結果は日本電池の落札に終わった。

この頃私は、生意気にも蓄電池の設計分野における、電気化学技術の進歩にやや失望していたのと、大学時代の勉強不足への反省とが心の中で交錯していた。そこで新たに勉強するなら米国へ行きたいと考えるようになった。昭和30年(1955年)当時は未だ敗戦国の日本人は、米国で自由にお金を使う事もできなかったし、又私自身もそのような経済的な余裕は一切なかつた。米国大使館の合衆国教育委員会というところで調べた結果、フルブライト渡航費貸与制度というのがあり、これはフルブライト全留学経費支給制度と異なって、それほど激甚な競争率ではないこともわかってきた。ただし既に米国の大学より助手か講師などで、給料支給の保証がないと受験資格がないので、出願者の数も限られていた。

元々英語が好きだったので、会社の勤務後の時間や土日を利用して英語の勉強に励んだ結果、米国ケンタッキー大学工学部電気工学科より助手としての採用許可を得ることができた。その上、運良く米国大使館の昭和31年(1956年)度の渡航費貸与学生として合格した。

後に判ったことだが、同期生の中には大日本インキ化学の川村茂邦が含まれていた。川村はその後大日本インキ化学を一大総合化学企業に育てた人である。川村とはその後40年以上経ってから一緒に仕事をする機会を得たが、すでに6年前に鬼籍の人となってしまった。